

昭和54年度定期総会開かる

昭和54年度定期総会議事録

日時 昭和54年4月27日(金) 14:00~15:30
 場所 学会センタービル 会議室
 東京都文京区弥生2-4-16
 出席者 小林宏治他 667名(内委任状による出席654)
 上記のとおり出席者が定款に定める定足数に達したので定款第28条により小林会長が議長となり議事録署名人に原野秀永、逆瀬川浩孝の両氏を選出して議事に入る。

第1号議案 昭和53年度事業報告の件
 佐久間理事より、昭和53年度事業報告(別掲)を行ない異議なく承認された。

第2号議案 昭和53年度決算報告の件
 横井理事より昭和53年度決算報告(別掲)を行ない異議なく承認された。

第3号議案 昭和54年度事業計画の件
 渡辺理事より、昭和54年度事業計画案(別掲)を説明し原案のとおり承認された。

第4号議案 昭和54年度予算案の件
 横井理事より、昭和54年度収支予算案(別掲)を説明し原案のとおり承認された。

第5号議案 昭和54年度役員選任の件
 昭和54年度の役員を別紙のとおり選出した。
 上記で議案の審議を終了し、第7回日本オペレーションズ・リサーチ学会文獻賞、第3回日本オペレーションズ・リサーチ学会実施賞、第4回日本オペレーションズ・リサーチ学会普及賞の発表ならびに表彰に入った。
 千住表彰委員長より選考経過の説明があり、会長より第7回日本オペレーションズ・リサーチ学会文獻賞は小島政和、田口東の両氏に、第3回日本オペレーションズ・リサーチ学会実施賞は中部電力株式会社、第4回日本オペレーションズ・リサーチ学会普及賞は森口繁一氏にそれぞれ授与された。

昭和53年度事業報告

1. 研究発表会およびシンポジウム
 (1) 5月31日、6月1日の両日、札幌市教育文化会館において、第43回研究発表会を開催し、6月2日には札幌市内を見学した。

特別テーマ エネルギー問題とOR
 特別講演 2件、一般発表 107件、自由討論 2件
 (2) 10月20日、21日の両日、青山学院大学青山キャンパスにおいて、第44回研究発表会を開催した。

特別テーマ 地域・環境の問題とOR
 特別講演 3件、一般発表 95件、ペーパー・フェア 15件、自由討論 1件
 (3) 10月21日、青山学院大学青山キャンパスにおいて第6回シンポジウム「予測と予知」を開催した。

2. 総会
 4月26日、鉄道会館ルビーホールにおいて、定期総会を開催した。

3. 理事会・評議員会
 昭和53年4月より理事会を7回、評議員会を1回開催した。

4. 各委員会
 編集委員会 12回、研究普及委員会 7回、IAOR委員会 9回、表彰委員会 2回

5. 刊行物
 「JORSJ」Vol.21, No. 1, 2, 3, 4の4冊および「オペレーションズ・リサーチ」第23巻第3号から第24巻第2号まで12冊発行した。

6. 国際協力
 (1) IAOR(International Abstracts in Operations Research)誌の発行に協力するとともにIAORの国内頒布を行なった。
 (2) カナダのトロントで開催された第8回IFORS国際会議(1978年6月19日~23日)に24名の日本代表を派遣した。

7. 研究会活動
 12の研究部会が活発な研究活動を行なった。

8. 普及活動
 (1) 月例講演会 第65回から71回まで7回開催した。
 (2) ORサロン 第17回、18回の2回開催した。

通算回数	開催年月日	テーマ	会場	参加人数
第17回	53. 7. 21	企業におけるOR	日本アイ・ビー・エム	13
第18回	53. 10. 21	地域・環境の問題とOR	青学会館	11

表 1 支部活動

	北海道	東北	中部	関西	中国・四国	九州
運営会議	支部総会 1 回 運営委員会 3 回	支部総会 1 回 運営委員会 1 回	支部総会 1 回 幹事会 4 回	支部総会 1 回 運営委員会 1 回	支部総会 1 回 運営委員会 1 回 幹事会 4 回	支部総会 1 回 運営委員会 1 回
研究会	研究会 2 回	研究会 4 回	研究会 6 回 研究発表会 1 回	研究会 4 回	研究会 2 回	研究会 4 回
講演会	月例講演会 1 回	講演会 1 回	月例講演会 1 回 講演会 1 回	講演会 2 回	月例講演会 1 回 講演会 5 回	月例講演会 1 回
出版			支部ニュース10回 支部研究発表会ア ブストラクト1回			支部ニュース 7 回
その他	春季研究発表会 見学会		見学会 1 回 懇親会 1 回 懇親ハイキング 1 回 懇親ソフトボール 1 回			春季研究発表会 準備委員会 5 回 見学会 1 回

9. 学会の長期計画の検討作業

学会のあり方について長期的な視点のもとで検討を行なった。その検討作業をふまえて、53年5月および10月の研究発表会においてつぎのような会員との討議を行ない、あわせてアンケートを実施した。

- (1) 53年5月31日 春季研究発表会（札幌市教育文化会館）の自由討論“学会のあり方について”
- (2) 53年10月20日 秋季研究発表会（青山学院大学）の自由討論“企業におけるOR活動”

以上より・OR学会の活動は理論面では、むしろ他学会より活発である。

- ・応用面、とくに企業へのアプローチを盛んにして理論を追い抜くよう仕向けねばならない。
- ・種々議論された具体策を1つでもよいから実現することが急務である。

との結論を得た。

10. 研究調査受託

テーマ「環境影響総合解析システムの設計に関する調査研究」

依頼者 環境庁企画調整局

上記のテーマについて委員会を設け研究を行ない、報告書ならびに資料をとりまとめ提出した。

11. 支部活動（表1）

12. 表彰

- (1) 日本オペレーションズ・リサーチ学会文献賞
 - 1) 第6回 “A Class of Inverse Theorems on Recursive Programming with Monotonicity.”

JORSJ, Vol.20, No.2. 岩本 誠一（広島大学）

- 2) 第7回 “On the Homotopic Approach to Systems of Equations with Separable Mappings” Mathematical Programming Study, Vol.7. 小島 政和（東京工業大学）
“Maximum Flow Problem in Discrete-Continuous Compound Systems and Its Numerical Approach” JORSJ, Vol.21, No.2. 田口 東（東京大学）

(2) 日本オペレーションズ・リサーチ学会普及賞

- 1) 第3回 後藤正夫（参議院議員）
- 2) 第4回 森口繁一（電気通信大学）

(3) 日本オペレーションズ・リサーチ学会実施賞

- 1) 第2回 株式会社 日立製作所
- 2) 第3回 中部電力株式会社

13. 会員増強

会長直属のタスク・フォースを組織し、7回にわたり会員増強策を検討した。主な検討事項はつぎのとおりである。

- (1) 関東支部設立の可否
- (2) マスコミの活用策
- (3) 事例研究発表の醸成方策
- (4) 公開セミナーの開催
- (5) 科学研究費の獲得方策
- (6) 賛助会員の増強方策

14. 他学協会との交流

日本経営工学会、日本品質管理学会、日本人間工学会と共同して、学会の発展に資する諸情報を交換するため4学会連絡会を発足させた。

15. 会員状況（1979年2月末日現在）

名誉会員5, 正会員1860, 学生会員187, 賛助会員99.

昭和53年度決算報告 (単位 円)

(1)収入: 会費収入26,720,140; 事業収入22,592,717;
その他を含め収入合計58,769,383.

(2)支出: 合計54,342,386.

次期繰越4,426,997.

昭和54年度事業計画

不確実性時代下のわが国社会では解決をせまられている課題は多く, その解決のためには今日ほどオペレーションズ・リサーチの発展, 活用が強く望まれている時期はない. この社会的要請に答えて, 昭和54年度はとくに本学会の在り方を長期的視野に立って検討しつつ, 下記の学会活動を活発に行ない, 会員増強に努める.

1. 研究発表会, シンポジウムおよび総会

(1) 研究発表会は, 春秋2回開催し, 春季は3月14日15日に北九州において, 秋季は9月20日, 21日に東京において開催する. さらに見学会を3月16日および9月22日に研究発表会と同時に行なう.

特別テーマは春季は「経営とOR」秋季は「企業におけるOR」とする.

(2) シンポジウムは9月19日東京において行なう.

(3) 定期総会は4月27日東京において行なう.

2. 刊行物

(1) 機関誌「オペレーションズ・リサーチ」を12号, 論文誌「Journal of the Operations Research Society of Japan」(日本オペレーションズ・リサーチ学会論文誌)を4号発行する.

(2) 研究発表アブストラクト集を2回発行する.

(3) 報文集の編集および発行を適宜行なう.

3. 国際協力

(1) 国内のOR文献抄録の作成を通じIAOR誌の発行に協力すると共にIAOR誌の国内頒布を行う.

(2) 来訪するOR専門家との接触の機会を密にする.

4. 研究部会活動

「ゲーム理論とその応用」, 「ゲームの理論」, 「電力システム」, 「流通」, 「地域環境計画マネジメント」, 「都市計画と交通」, 「政策科学」の既設7研究部会の活動を引き続き推進するとともに, 「数理計画法」, 「日本における社会システム分析」, 「数理計画」, 「実施理論」の4部会を新設し, その活動を開始する.

5. 研究調査

適当な機関からの研究調査委託に応ずる.

6. 会員名簿の発行

前回の名簿発行後3年を経過しているので新しく会員名簿を発行する.

7. 普及活動

研究部会, 学会誌の特集テーマ等にもとづくセミナーを企画し実施する. 月例講演会, 座談会, 学会活動の広報, 記念事業(講演会, 出版)等のOR普及活動に努める.

8. 地方講演会

本部より講師を派遣し, 地方講演会を開催する.

9. 支部活動

各支部において研究会, 講演会, 見学会等の活動を行なう.

10. 表彰

文献賞, 実施賞, 普及賞の昭和54年度選考を行なう.

11. 受賞推薦

他の学協会の依頼に応じ受賞候補者の推薦に協力する

12. 他学協会との交流

他学協会との交流を積極的に進める.

昭和54年度予算 (単位 円)

(1)収入: 会費28,770,000; 事業14,989,800; その他を含め合計52,588,997.

(2)支出: 管理費13,721,100; 事業費35,352,750; その他を含め合計52,588,997.

第3回日本OR学会実施賞

昭和53年度の普及賞は, 表彰委員会の推薦により中部電力株式会社に授与することが理事会で決定, 4月27日開催の昭和54年度定期総会において表彰された.

選考理由

エネルギーおよび環境問題の解決は国民的課題である. 中部電力は, 早くからこの種の問題を重視し, 経営・技術の多くの分野で合理化・最適化に取り組んでいる. このような環境の中で, 同社にOR組織ができたのは昭和34年, 以来20年におわたって, 100件を越える諸問題を

扱い大きな成果を上げてきた.

対象とした分野は, 企画・経理・労務・資材・水力・火力・工務部門等主要部門のすべてにわたり, その実施・普及の広さは格別である. とくにダム建設のような大きなプロジェクトの工事計画, 火力プラントの運用計画などにおける適切なOR実践の効果は莫大であった.

当学会研究発表大会その他における同社の発表も活発で, 当学会関係だけで30件以上に達している. また, 当学会の理事・委員その他としても積極的に貢献され, 中部支部の設立およびその後の諸活動において中心的役割を果たしてこられた. 東海3県の工業配置問題や交通事故

データの分析等で、同社内の問題だけでなく、地域社会の問題解決にも、同社のORグループが活躍し、社会的貢献とともにORの意義を高めた。

現在、同社のORグループは情報システム部に所属し、他の情報システムグループとも協力して、鋭意ORの実践に努めておられるが、同社内のOR普及にも力を注がれ、その結果がOR活用の基盤となっている。昭和36年以来毎年定期的にOR関係コースを開き、延600名に教育を行なっている。また社外のコースにも参加させ、とくに通信教育修了者は1000名を越えている。

以上、同社における組織的OR活動と大きな成果を上げた実践、ならびに学会・地域に対する貢献・普及を考慮して、実施賞を授与することに決定した。

第4回日本OR学会普及賞

昭和53年度の日本OR学会普及賞は表彰委員会の推薦により、森口繁一博士に授与することが理事会で決定し、4月27日開催の定期総会において表彰された。

選考理由

ORを普及させるためには社会全般に対するORの啓蒙と環境づくり、学問水準の向上、計算機活用法の研究と普及、OR学会の適切な運営等、幅広い活動が必要である。森口繁一先生がこれらの全分野にわたり、きわめて幅広く、かつ深く、情熱をもって活躍してこられたことは広く知られているとおりである。

すなわち、1957年5月のOR学会設立の際、その実行委員として尽力されて以来、学会の理事、副会長、会長を歴任され、その間、刊行物委員長、研究普及委員長、IAOR委員長、IFORSH本代表、表彰委員などをしばしば兼任されたほか、学会の法人化、国際会議の開催、機関誌オペレーションズ・リサーチの発行等、こんにちに至るまで一貫して当学会の充実、発展を通じてORの普及に貢献された功績はきわめて大きい。

そのほか、ORに関連する多数のすぐれた論文、単行本などの著作活動、テレビ、講演、公共団体や企業の指導など、ORの普及に関する先生の活動は枚挙にいとまがないほどである。

以上の理由により、理事会は当学会のフェローであり名誉会員である森口繁一先生に日本OR学会普及賞を贈ることに決定した。

第7回日本OR学会文献賞

昭和53年度の文献賞は、本会機関誌を中心に会員からの推薦を募集し、国内外の関連学術誌に掲載された若い日本人の論文6篇の中から選考を行なった。その結果、東京工業大学理学部情報科学科助教授小島政和君の論文

“On the Homotopic Approach to Systems of Equations with Separable Mappings,” *Mathematical Programming Study*, Vol. 7, pp. 170~184 (1978), および東京大学工学部計数工学科助手田口東君の論文“Maximum Flow Problem in Discrete-Continuous Compound Systems and Its Numerical Approach,” *JORSJ*, Vol. 21, No. 2, pp. 245~272 (June 1978)の2篇に、文献賞を授与することを理事会において決定、両君は4月27日開催の昭和54年度定期総会において表彰された。

選考理由

小島君は、数理計画法、数値計算法の分野において近年目覚ましい進歩を遂げつつある新しい手法の1つであるいわゆる“不動点アルゴリズム”に関して早くから先駆的研究に着手し、すでに数篇の論文を *Mathematical Programming*, *Mathematics of Operations Research* 等の雑誌に発表しており、その業績は国際的にも認められつつある。今回受賞の対象となった論文は、それら一連の小島君の研究の中で、とくに方程式が1変数の関数の和の形に表わされる場合の不動点アルゴリズムの計算効率を向上させることを工夫したもので、問題の次元数が大きければ大きいほど、また必要とされる精度が高ければ高いほど、その効果が高まることを理論、実験の両面から示している。論文の性格はかなり数学的であるが、近い将来ORの実験家にも役立つ強力な数学的道具にまで完成されることが期待される。

小島君は1947年2月23日生；1969年3月慶応義塾大学工学部管理工学科卒業；1974年3月同大学院工学研究科博士課程修了、工学博士；慶応義塾大学工学部管理工学科助手、東京工業大学理学部情報科学科助手を経て、1979年4月より東京工業大学理学部情報科学科助教授となり現在に至っている。本会機関誌には、不動点アルゴリズムについての入門的解説を1977年1月号~4月号に連載執筆している。また、1976年~1977年には本会機関誌の編集幹事としても活躍した。

田口君の受賞論文は、ネットワーク型の部分と連続体の部分とが複合している非線形な系の上での流れの問題を扱ったもので、そのような問題の数学的定式化と双対性その他の数学的諸性質の検討、有限要素近似による数値解法の確立、細密な市街道と高速幹線道とが混在する都市の道路網において前者の部分と連続体近似して扱うという着想およびその際の近似連続体の特性の決定法、等を理論的に論じるとともに、東京都心部の道路網を例にとり、最大流問題に対する方法の実用性を具体的に示している。この種の研究は世界的にみても数少なく、とくに、現実の問題の大胆な数学的定式化から始めて、

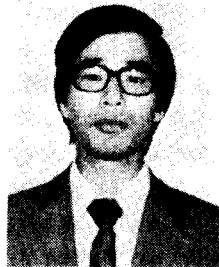
問題の数学的な検討, 実用的な近似解法, かなり大規模な実際例に至るまで一貫して扱っている本論文は, ORの論文として模範的な型の1つであるといえる. 結果の提示方法についても工夫と努力のあとがみられる. 適用可能性の拡大, 実用性の向上, 理論的な基礎固め, 等々多くの方面に, 著者が今後いっそう研究を深めることが期待される.

田口君は1951年11月8日生; 1974年3月東京大学工学部計数工学科卒業(数理工学専修); 1974年4月~1976年9月三菱重工株式会社技術本部高砂研究所勤務; 1976年10月より東京大学工学部計数工学科助手となり現在に至っている. 本会機関誌には交通網の分析手法についての解説を1978年12月号に執筆しており, 春秋研究発表会においても多くの魅力的な発表をしている. また, 1977年より本会庶務幹事として活躍している.

● 小島さんのプロフィール ●

私が慶応義塾大学の修士1年の頃私にはよくわからない輪講のとき, 黒板の真正面の関根智明先生の隣にすわり盛んに質問をなさっていた小柄ながら, 開襟シャツの袖口からがっしりとした腕をのぞかせている人がいました. やがて, その優しい顔の人は小島さんといって, 実はお酒が一滴も飲めないことや, テニス上手なことを知りました. こうしてお会いしてから東京工業大学へ移られるまでの2年間に私達学生は小島さんから, 学問そのものにとどまらず, 学問に対する真面目な態度を教えられました. 輪講前の予習のとき「まあ, いいな。」と妥協した点は必ずといっていいほど指摘され改めて自分の理解の浅さを知らされたものです. このように書きますと, 小島さんはいかにもこわい人のようですが, 実際は本当に飾らない穏やかなお人柄です. ですから私達学生は何かといったら小島さん, 小島さんとずいぶんご研究の邪魔をしたものです.

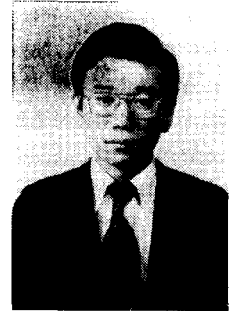
小島さんは慶応義塾大学にいらっしゃった頃は, ゲーム理論, 多目的計画法, 相補性と不動点理論等の研究に従事されていました. 東京工業大学に移られてからのご研究の方向については詳しくは知りませんが, 最近書かれた論文には, 今回受賞の対象となった On the homotopic approach to systems of equations with separable mappings 以外に, A PL homotopy for finding all the roots of a polynomial, Studies of



PL approximation of piecewise C^1 mappings in fixed points and complementary theory, A complementary pivoting approach to parametric nonlinear programming 等があります. (山本芳嗣)

● 田口 東君のこと ●

オペレーションズ・リサーチ学会の文献賞に輝く田口君について何か書いてくれないかという依頼があり, 喜んでお引受けした. 田口君は昭和49年に東京大学工学部の計数工学科を卒業すると, 直ちに三菱重工に入社し, 実際に物をつくることをしばらくして, 計数工学科の助手として大学にもどり研究者の生活に入った人である.



工学というのがだんだん広い意味をもつようになり, それにつれて, 工学にたずさわる人の気質も変化してきたように思われる. 工学に含まれる領域がいくら広がっても, 工学というのは最終的には何かを作ってみることであり, それを担うエンジニアは物を作ることが好きでなければならぬという当りのことが, このところ怪しくなってきた. これは困ったことであり, 数理工学を専攻する人であっても, 子供の頃から工作が好きで, 大人になっても「作る」ということへの興味を失っていない人でなければならぬはずだし, いろいろ工夫しながら物を作ることによって得られたセンスをもち合わせていないエンジニアの研究は面白くも, すぐれたものでもないであろう. しかし, 現実はこちらと逆の考え方をするエンジニアが増えてきているのを嘆いていたところ, 田口君が真のエンジニアの素質をもっていることを発見し, きっといい仕事をすると期待していたところ, はやくも, 最初の本格的論文というべきものが文献賞を獲得し研究者として順調なスタートを切ったことに心から拍手をおくりたい.

夏, 校内を「がんばらなくちゃ」と言いながらかけ, 冬, 大学院生と暗がりのなかでサーキットトレーニングをやっている田口君は無邪気な学生のようなものである. 暇な折にはデパートの玩具売場を歩きまわり, 帆船の模型を作りながら大航海時代を夢みたりもしている.

いろんな意味でのエンジニアの素質に恵まれている田口君が, それを生かして, これからもどんどんすぐれた研究を発表してくれることを大いに期待する次第である. (奥平耕造)